

梱包保存された町並み美術館計画

～空間で見つ直す都市のリアル～

1110339 豊嶋 盛

高知工科大学工学部社会システム工学科

衰退や発展を繰り返し、変わりゆく町並み。変化を伴う建築風景を残すにはどうすればいいだろうか。今回提案するのは、そういった時の流れを受けざるをえない場の実験的空間保存方法である。対象敷地は、都市部でよく見かけそうな普遍的な町並みを持つ場所。平面の切り取りを行い、それらの平面上の建築を立体的に包み込む。そうしたことで出来るのは、街のかけらを詰め込んだ複合的内部空間を持つ展示施設。町の記憶を閉じ込めた美術館で、町の在り方を見つめ直す。

Key Words : 変わりゆく普遍的風景、町の梱包、風景展示、ランドアート

1. 背景

時代の流れと共に目まぐるしい変化を遂げてきた現代。それと同時に、都市における町並みというものも大きな変化を遂げてきた。様々な技術の開発・経済の成長によって、町は発展し大きく広がってきた。それとは逆に、発展して行く街に吸い取られていくように衰退していき活気がなくなる町並みもある。建築的風景の衰退と発展が日々展開されていくことで、町はある種生き物のごとく大きく変わってきた。

そういった変化の波に対し、人々が保存しようとする動きはある。人々が重要であると指定されたものは文化財として残されていく。だがしかし、そういった文化財として残されるのは歴史的町並みを持つものであるのが常である。そうではなく、私たちが生活するもっと日常的で身近な部分にもっと目を向けるべきではないだろうか。

そこで今回、人々の身近な町並みの梱包保存方法について計画する。価値としては認められない普遍的な町並みをひとつの空間として保存する実験的提案である。そうする上で、場所を問わずどんな場所でも行なえ、最終的には世界全体にも及ぶような存在を目指す。

2. 敷地

今回計画する敷地は、高知市薊野にある久万川をまたぐ薊野大橋周辺である。選定の理由は高架橋によりクロスされた道路、そして鉄道が交わるといったどこにでも見かけられるような風景であるからだ。このような無個性な町並みを持つ場所を敷地として選択する事重要なポイントである。周辺の建物は高層から低層のもの、集合住宅や一般住宅や商業建築とあり、今回の計画を行う上で展示空間内部を充実させてくれるものであると考えた。

3. 全体計画

計画の全体構成については以下である。

- 展示空間の全体形成
- 梱包町並み展示空間の内部構成
- 歴史展示空間の導入
- 全体を覆う皮膜による施設統合
- 生活基盤となるポイド形成
- 周辺空間の形成



敷地周辺写真

町並みの梱包方法の大きな方針であるが、選定した敷地のある立体の展開図で切り取り、その展開を再度立体として図形を建ち上げることで形成する。それでは全体構成の詳細や、形成までのプロセスについて後述する。

a. 展示空間の全体形成

展示空間はピラミッド型の展開図による形成を行なう。展開する図形をピラミッド型に選んだ理由は、大規模な建築物になるので、見た目のボリュームを抑える事と、その形の象徴性にある。

計画の規模として、今回選定した敷地に 100m 四方で展示空間を展開する。実際の切り取りだが、まず 100m 四方内を 50m 四方に 4 分割する。そのうち 2 つの正方形を高さ 20m ピラミッドとし、展示空間を建ち上げる。ピラミッド展開図の配置であるが、100m 四方の中心を軸にし対角線上に配置。そこから敷地内の平面切り取りに入る。しかしこのまま切り取ってしまうと 2 つのピラミッドの展開図の重なり部分が生じる。同一平面が 2 つ出来てしまうため、これは取り除く。そして、取り除いた事でピラミッドの変形型が出来上がる。この際の切り取りによる開口によって 2 つのピラミッドが互いを見つめ合う形をとる。見つめ合うピラミッドは互いの存在を確認し合うように対比的に存在する。

b. 梱包町並み展示空間の内部空間形成

ピラミッド型の展示空間である梱包町並み展示空間（以下、梱包空間とする）の内部は建築物が複雑に絡み合って形成される。切り取りを行なった平面から建築物が再び垂直に建ち上がり、建築物どうしが斜交し合うことで複合的内部空間が出来上がる。切り取られた町並みは以前の建築としての機能は失われ、展示物としての空間へと変化する。以前は同一平面の中に存在した建築が、立体的に重なり合っている存在する。壁であった物が床になり床が天井になるなど、内部には重力を失ったかのような感覚にとられる。

c. 歴史展示空間の導入

展示空間が瞬間的な時間の保存であるのに対して、そこまでに至る町の移り変わり保存し展示する施設空間を作成する。展示空間のピラミッドとは対照的に、歴史展示空間（以下、歴史空間とする）の外形は上下逆転した逆ピラミッド型で形成する。梱包空間と同じ大きさのピラミッドを 100m 四方の中心で生成するが、その時計画範囲内の梱包空間で使用されなかった部分（図 1）のみで行なう。ピラミッドの頂点から 16m を地下空間として埋め込む。地下に埋め込むのは、町の記憶の中核を目指すという行為を、地下深くまでもぐる行為と逆ピラミッドの頂点を持つ空間で体験するためである。

d. 全体を覆う皮膜による施設統合

それぞれ出来上がった梱包空間と歴史空間は、現

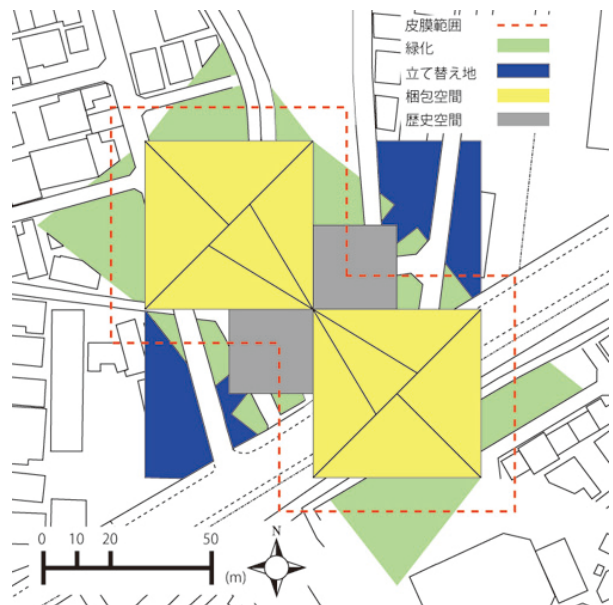


図 1 全体計画図

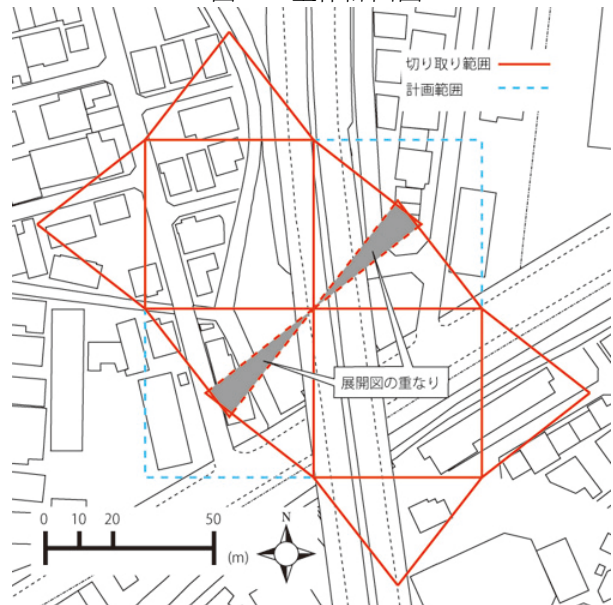
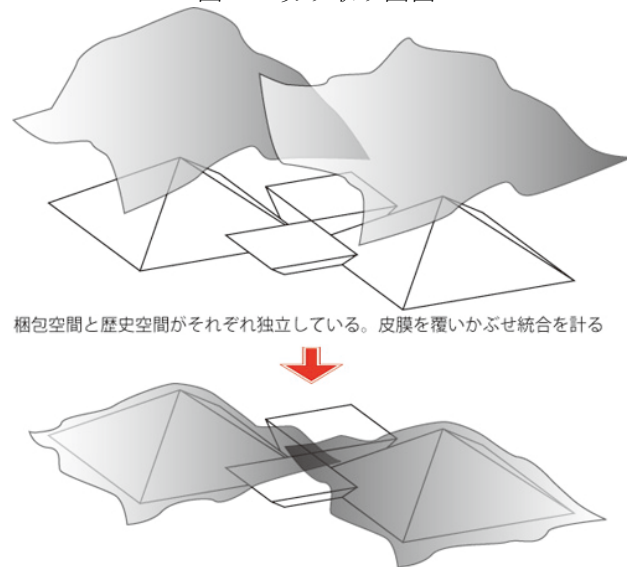


図 2 切り取り図面



全体性をもつ1つの施設として機能する。

図 3 膜ダイアグラム

在の状態ではまとまりなく独立して存在している。そこで、1つの施設としての全体性を持たすための統合を計る。統合の方法として、展示ピラミッドに覆い被さるような膜を作り、梱包空間と歴史空間を覆い2つの空間を同時に包み込む。膜は外形だけではなく内部にまで及ぶ。膜は歴史空間へと伸びてゆき、内部まで侵入して美術館内の壁や天井となって施設の内部空間を形成する。膜によって空間同士・建物同士を連結させ大きな塊となった事で、全体が1つのまとまりを持った施設となる。

e. 生活基盤となるボイド形成

閉じ込めを行なった内部空間と今後変化していく外部との差異を引き出すため、外部の変化が反映されるための生活基盤となるボイドを形成する。道路や水路などの現状を維持した上でなければ外部進行はありえない。そのため施設内部を人々や自動車・鉄道などが横断し、内部では活発な動きを見せる。そうする事で外部の進行を維持させる。

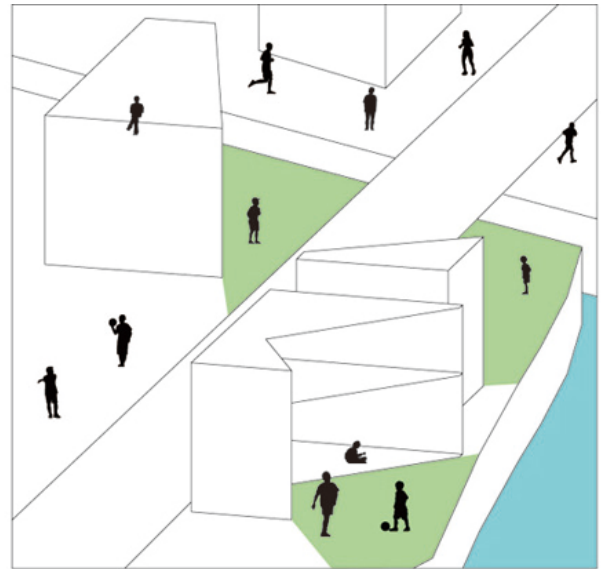
f. 周辺形成

立体の展開図で切り取られた平面のうち、内部に取り込まれなかった建築物は、図4のように切り欠かれた形のまま建築として不完全な形で存在する。不完全なままの建築物は、展示空間外部で梱包空間内の展示物とは別種の展示作品として機能する。周囲に散らばる謎の建築物は周辺のアクセントとなり新たな町の風景を作る。

そして次に、展開図で切り取られたことで内部に閉じ込められた建物の立て替えを行なう。100m 四方の範囲におけるピラミッド形成で使用されなかった範囲（立て替え地は図1の青で塗りつぶされた部分である。）に立て替える。立て替えた建物は100m 四方の範囲内で美術館全体と1つの建築物のような全体性を持つ。

最後に、全体の緑化である。まず、梱包立体後の展開平面を行なった敷地は緑化し、自然へと還元される。（緑化ラインは図1の緑色で示している部分である。）その次に、膜の外側の緑化である。膜を

被せた事で、さらに大きくなったピラミッド外形の威圧感を抑えるため行なう。ピラミッド外形とも相まってまるで山のような姿となり、有機的な外観をつくりあげる。



切り取られてしまった元は建築物であった物が、内部をむき出した状態で周辺に点在している。外部に展示されている展示物として機能する。

図4 外部展示物パース

4. 美術館の効能と波及

4.1 ランドアートとして

内部空間とは別に、外部空間がもたらす効果というものもある。外部のピラミッド型造形の象徴的な部分と膜の緑化により、一種のランドアートとしての側面を持ち得る。それに、周辺の緑化部分と展開図の切り取りで内部に閉じ込められなかった建築物が、全体のランドアート性というものを高めることとなる。

4.2 周辺の変化を見つめる

切り取りを行い強制的に緑化をした土地は、今後の発展に応じた変形を行なっていく。例えば、都市

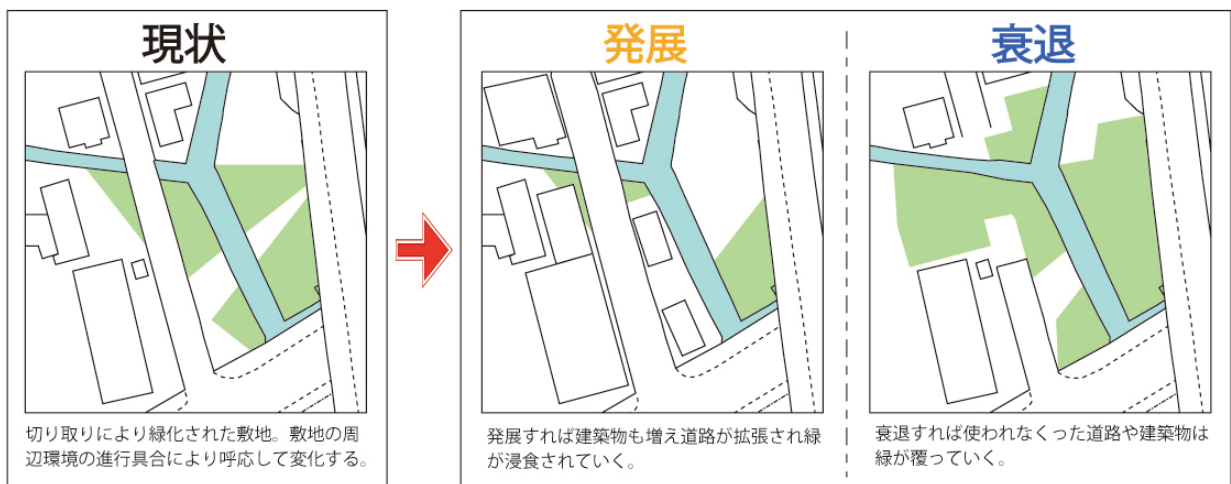


図5 浸食ダイアグラム

の発展が行なわれていけば緑化した展開図の切り取り部分が開発により浸食されていき、衰退するので

あれば逆に緑が広がっていき都市を浸食していく。

(図5参照) いわば緑化した大地が都市の変容過程のバロメーターとして機能するのだ。

4.3 風景を刺激し、新しい未来形へと

全体計画を通し、ランドアートとしての側面と、大規模な展示空間を持つ美術館施設というファクターが、周辺の保存を行なうため以上に、この敷地に対する起爆剤として効果をもたらす。果たして発展か衰退かは分からないが、停滞を行なっていた土地に何かしらの反応が起こりえるだろう。そして、保存を行ない町並みというもので町の在り方を見つめ直し、内部の空間と外の空間の差異や、切り取りを行なった緑化部分の浸食具合で今後の姿、未来形の町の姿が見えてくるはずだ。

4.5 都市のリアルを見つめる

今回の計画で私が最もやりたかった事が、特色のない一般的な町並みを保存するという事である。私たちが普通に生活をしていると気づきにくい身近な風景を、独自の視点でユニークな保存方法を提案出来ないかと思ったのがきっかけである。計画を通して、こういった無名な町にこそ都市としてのリアリティが宿っているのではないかと考えた。私たちが今いる場所というものを再認識したうえで、新たな都市の未来というものを見据えていきたいと思う。